



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4112号 2017.12.31 発行

### 「コンビニ受診」控えて...10年で4倍「限界」

読売新聞 2017年12月30日



#### 診療開始前の長崎県佐世保市立急病診療所

夜間や休日に急患を受け入れている長崎県佐世保市立急病診療所が、緊急性のない病気やけがでの「コンビニ受診」を控えるよう、市報などで異例の呼びかけを行っている。

「昼間は仕事があるから」といった理由で安易に利用する患者が後を絶たず、受診者がこの10年で4倍に増えたためだ。市は「医師の負担は限界に近い。地域医療を守るためにも節度ある利用を」と訴えている。

かつて同市梅田町にあった診療所は2009年6月、高砂町に新築された市中央保健福祉センターに移転。市内外の協力医が月～土曜日の夜間（午後8～11時）に内科と小児科、日曜祝日の日中（午前10時～午後6時）に両科と外科を診療している。

市によると、移転で交通の便が良くなり、診療科目も増えたことから、06年度に延べ3723人だった受診者は09年度に1万人を初めて突破した。12年度以降は1万5000人前後で推移し、16年度は1万5182人。近年は慢性的に混雑しており、特に年末年始は順番待ちの列が建物の外まで続き、1人の医師が100人以上の患者を診る日もあったという。

混雑の要因の一つが、症状が軽いと自覚しながら利用する人の増加だ。特に医師の少ない小児科では、急患への対応に遅れが生じかねない深刻な状況になっている。

診療所では薬は1日分程度しか処方しておらず、経過観察も難しいという。診療所の吉崎康成事務長は「診療所を存続するためにもご理解をお願いしたい。まずはかかりつけ医を持ち、病気の予防や早期発見に努めてほしい」と話している。（林堯志）

### 私大112法人が経営難、21法人は破綻の恐れ

読売新聞 2017年12月31日

#### ◆私立大・短大の経営状況の分布



※日本私立学校振興・共済事業団まとめ。2014～16年度のデータを分析

私立大・短大を運営する全国660法人のうち112法人（17%）は経営困難な状態にあることが日本私立学校振興・共済事業団（東京）の調査でわかった。

このうち21法人は経営を改善しないと、2019年度末までに破綻する恐れがあるとしている。18年以降は18歳人口が再び減少局面に入り、経営環境の一層の悪化が懸念される。

各法人は07年以降、事業団作成の指標を使い、直近3年の財務データを基に経営診断を実施。事業団も独自に各法人のチェックを行っているが、結果は「私大経営への影響」を理由に非開示とされてきた。

読売新聞は1月、事業団に情報公開を請求。一度は不開示とされたが、総務省の審査会で異議が認められ、12月下旬に初公開された。

## 保育士修学資金貸付事業「空振り」 50人枠に応募9人 神戸市

神戸新聞 2017年12月30日



兵庫県と神戸市の保育士修学資金貸付事業をPRするチラシ。神戸市内の大学学長らから意見を聞く久元喜造市長ら＝12月15日、神戸市灘区



各地で保育士確保が課題になる中、兵庫県と神戸市が今年から始めた「保育士修学資金貸付事業」の申込者数が、募集した枠を大きく下回っていることが分かった。授業料などを無利子で貸し、返済免除もある制度だが、特に神戸市は50人程度の枠に申し込みはわずか9人。保育士を安定的に確保し、経済的に苦しい学生も支援できる一と“一石二鳥”を狙ったが、空振りに終わった形だ。候補者を推薦する大学などからは「貸し付けの条件が厳しすぎる」などの声も上がっており、兵庫県と神戸市は近く制度を見直す。

「貸付事業に期待していたが、所得要件などが厳しく、生活保護を受けるレベルの困窮度でなければ申し込めない印象だ」。保育士資格を取得できる児童教育学科がある神戸親和女子大学（神戸市北区）の山本裕之学長はため息をつく。同大学では卒業生の大半が県内で就職する一方で、奨学金を受ける割合は50・3%に上り、支援策のニーズは多いとみている。

保育士修学資金貸付事業は、神戸市と兵庫県が今年から導入した。兵庫県内（神戸市は市内）に住民票があり、県内の大学などで保育士資格取得を目指す優秀な学生に、授業料などとして月に上限5万円（最大2年間）に加え、入学準備金、就職準備金各20万円以内を無利子で貸し付ける。さらに兵庫県内の保育所などで5年間保育士として働けば、返済が免除される。

保育士確保を巡っては、各自治体が手当積み増しや一時金支給など、独自施策の“アピール合戦”を繰り広げる。神戸市も「よそに負けないよう、より魅力を訴える必要がある」（子育て支援部振興課）として、支援策のメニューに同貸付事業を盛り込んだが、申し込みは約50人の枠に対し2割未満の9人。兵庫県も約80人の枠で42人とどまった。

久元喜造・神戸市長は、市内でこのほど開かれた会合で「これだけ少ないのは制度に欠陥があると言わざるを得ない」とし、見直す方針を示した。

神戸市と兵庫県の担当者は「周知期間が2～3カ月と短かった」と説明するが、神戸市内の大学関係者は「家庭の経済状況等から真に貸付が必要」「地方公共団体等から同種の貸付を受けていない」などの規定が「分かりにくく、厳しい」と指摘。「他の制度は使えないとなると、落選時のリスクが高く、敬遠される」との声も上がる。

兵庫県は来年度に向け、所得要件を日本学生支援機構の第一種奨学金（無利子）の基準にそろえ、県外に住民票のある学生も対象に加える方針だ。一方、両親が非正規雇用やひとり親の世帯など、学費減免の対象外だが経済的に苦しい学生は増えているといい、大学関係者は「学生の実情に見合った使いやすい制度にしてほしい」と訴えている。（広畑千春）

モンスター・クレマー、放火や恐喝事件も 流通・サービス業の7割が被害

産経新聞 2017年12月31日

悪質な客による店への苦情をめぐるトラブルは後を絶たない。苦情がエスカレートする客は「モンスター・クレマー」と呼ばれ、犯罪に至ったケースもある。企業の労働組合で作るUAゼンセンは、流通・サービス業で悪質なクレームを受けた従業員は約7割に上るとして、厚生労働省に対策を求めている。

糸岡さんが暴行を受け死亡した居酒屋＝30日、滋賀県草津市

大阪市中央区の大丸心斎橋店で平成20年、高級婦人服を購入した女が「イタリアブランドなのに、なんで中国製なんだ」などとクレームをつけ、トイレや婦人服売り場など3カ所に放火した事件が発生。数日前から執拗（しつよう）に商品の返金を求めているといい、大阪地裁は現住建造物等放火などの罪で有罪判決を言い渡した。

愛知県では、クリーニングに出したシルクシャツの仕上がりに「風合いが悪い」などとクレームをつけ、100万円の弁償を求めた母親と息子が同年、恐喝容疑で逮捕された。弁償を拒否したクリーニング取次店を、親子は「今後の代金を一生ただにしろ」と脅迫して3年近くにわたって、約300回分計187万円の代金の支払いを免れていたという。

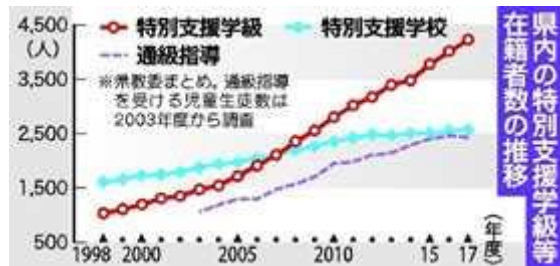
最近では、26年に滋賀県近江八幡市のボウリング場で、男らが女性店員の接客に言いがかりをつけて「謝れ」などと土下座を要求し、強要容疑で逮捕。同年には大阪府茨木市のコンビニエンスストアでも客が店長に言いがかりをつけ、たばこを脅し取ったとして恐喝容疑で逮捕されている。

UAゼンセンによると、悪質クレームには土下座を強要されたりセクハラを受けたりするケースも含まれる。関係業界の従業員に対するアンケートでは、回答した約5万人のうち、悪質クレームを受けたことがあると回答したのは、約7割の約3万6千人。悪質クレームへの対応が原因で精神疾患を発症した従業員も359人いたという。



### 特別支援学級在籍者 4230人、21年連続増 明確な基準が課題

下野新聞 2017年12月31日



県内公立小中学校の特別支援学級在籍者数は5月1日現在4230人で、20年間で4倍に増えたことが30日までに、県教委のまとめで分かった。増加は21年連続。特別支援学校（幼稚部・高等部含む）の在籍者も2565人で過去最多となった。通常の学級に在籍しながら別室などで授業を受ける「通級指導」の児童生徒は2429人と特別支援学校の在籍者数に迫る。対象者の障害の程度に明確な基準がなく、学校や市町教委の判断が大きく影響することが課題となっている。

特別支援学級は、知的障害や自閉症などの障害がある子どもが対象。在籍者は年間200人程度のペースで増加しており、知的障害と自閉症、情緒障害が全体の99%を占める。

中・重度障害の児童生徒が通う特別支援学校は知的障害の割合が85%。特別支援学級・学校ともに肢体不自由や聴覚障害などの児童生徒数は横ばいで推移している。

特別支援教育を受ける際の障害の程度について、視覚や聴覚障害の場合は基準の数値などが明確だが、発達障害は文言で示されているのみ。療育手帳が判断の目安になる知的障害と異なり、情緒障害を判断するのは、より分かりにくさがあるという。

県教委によると、在籍者が増えているのは、発達障害の早期発見や保護者らの特別支援教育への理解が進んだことが一因。だが、教育現場の意識も要因とみられている。現場では、通常の学級より通級指導、通級指導より特別支援学級へと児童生徒を移行させる構図があるという。

## ふるさと納税で増額？＝高校就学支援金判定見直し－文科省

時事通信 2017年12月30日

文部科学省は30日、高校授業料を国が支援する就学支援金制度について、対象世帯の所得を判定する方法を見直す方針を固めた。現行制度では、保護者が意図的にふるさと納税への寄付を行うことで支援金の受給額が多くなるケースがあるため、こうした影響を受けない基準に改める方針だ。就学支援金は、年収約910万円未満の世帯に、公立、私立とも年間118800円を支給する制度。私立の場合、所得に応じて1.5～2.5倍を支給しており、さらに独自の上乗せをしている都道府県も多い。現在は、保護者の市町村民税の所得割額を基準に年収を推定。課税証明書に額が明記されており、判定する都道府県の事務負担が少ないなどのメリットがある。ただ、所得割額はふるさと納税や住宅ローンなどの税額控除額が差し引かれた後の数字。インターネット上では「学費節約」「裏ワザ」などどうしたい、ふるさと納税で所得割額を少なくして受給額を増やす方法を紹介するサイトも見られる。文科省は制度本来の趣旨に沿って、必要な世帯に支援が届くよう有識者会議で対応を検討してきた。会議は、控除額を差し引く前の課税所得金額を判定基準にする方向で検討。マイナンバー制度に対応した事務処理システムが2019年度から導入されるため、金額の把握や判定事務も容易になると判断、今年度内に最終的な結論をまとめる。

## 「去年今年貫く棒の如きもの」...

福井新聞 2017年12月31日

「去年今年（こぞことし）貫く棒の如（ごと）きもの」。高浜虚子が1950年暮れ、新春放送用に詠んだ有名句である。たった一夜で呼び名は変わるが、歳月を貫くものは変わらない...▼そのとき虚子は76歳。年齢を重ねた俳人らしくどっしりと構えた大柄な一句である。鎌倉駅に掲示されたものを、川端康成が随筆で取り上げ一気に知れ渡った▼日本の今年を振り返り、来る新年に思いを巡らすと、そこを貫流する「棒の如きもの」に不安を覚える。それはわが国が抱える社会的かつ政治的な重要課題である▼何かと言えば、とどまることのない「少子化」だ。厚生労働省によると、2017年生まれの赤ちゃんは約94万人。2年続けて100万人を下回り、統計を取り始めた1899年以降最少とみられる▼今年話題の「未来の年表」（河合雅司著、講談社現代新書）は人口減少で起きる問題を描き出した。介護離職の続出、東京都の人口低落、輸血用血液の不足などを指摘する▼さらに例を挙げれば、18年は大学淘汰（とうた）の時代。20年は女性の過半数が50歳以上になる。39年になると多死社会に入り、深刻な火葬場不足に陥るといふ▼少子化問題は社会保障費の負担増や消費の低迷、ひいては経済の先細りなど悪影響を与える。30年ほど前から言われていたが、それを怠ったのは政治である。自ら招いた「国難」に来年こそ全力投球を望みたい。

## （社説）2017－2018 聞けなかった声、を

朝日新聞 2017年12月31日

北九州空港から東九州自動車道に乗り南下すること約30分、左にミカン園が見えてきた。

ここはミカン農家の岡本栄一さん（71）が買収に応じず、唯一未開通だった区間。福岡県が強制収用し、園を分断して昨春、宮崎市まで全線開通した。

2年前、大みそか付の社説に岡本さんのことを書いた。久々の再会。当時は「怒」のエネルギーに満ちていたが、なんだろう、「惑」の気配が濃くなった。

### ■排除された「異物」

「今年は出来が悪くて」。木の乾燥が激しいのは、地下の水脈が切られたからだと思うが、確たることはわからない。道路付近では猟銃が使えなくなり、鹿の食害も激化した。わな



猟の免許を取ったが、効果はわからない。理由はわからないが注文と違う品種の苗木が届く。文句を言うと「ミカンなんか植えんでも高速道路の補償金をもらえばいい」と返されたという。

「分断されたらもう、あちこちがおかしくなって」

この土地で50年、甘いミカンを作るためにこつこつと手入れし、築きあげてきた世界がきしきしときしみ、すっかり見通しがきかなくなってしまった。

その痛苦はどうすればあがなえるのか。岡本さんは18年間反対を貫き、約1億7千万円の補償金の受領もずっと拒んできたが、先月、うち数千万円を受け取った。園が二分されて作業効率が落ち、借金が膨らみ、どうにもならなくなったという。

—そうでしたか。受け取る時、どんな心境でしたか？

一瞬、身体をこわばらせたのち、残る補償金のうち3千万円ほどを使って、公共工事を改革するための基金をつくるつもりだと、今後の構想を語った。

—あの、どんな心境……。

なんでそんなこと聞くのよおと、うつむく。ごめんなさい。でもわからないんです。なぜ岡本さんがこんな目に遭うのか。父親から受け継いだ土地を守りミカンを作り続けたかっただけなのに、その思いを大事にし過ぎたということなのか——。

「わからん。自分のことは、わからんよ」

全線開通による時間短縮効果は約10分。「人や物の流れがスムーズになる」とうたわれる。

スムーズになる。「異物」が排除されれば、それは、確かに。

#### ■預けられた「私」

精神科医で立教大教授の香山リカさんは最近、診察室を訪れる若者の変化を感じている。

「つらいんです」。どういう風にですか？と聞いても、「つらいってことです」。

単調なやりとりが増え、「この感じがとれる薬ください」と、カウンセリングより手取り早い薬物療法を望む人も目につくようになった。自分の内面を掘り下げ言葉で表現する力が落ちているように思う。

大学で学生たちと接していても、『私』をどこかに預けている感じがする」という。

—なぜ預けるんでしょう？

「自分の弱さと向き合うのはとても苦しいことだから、でしょうね」

それと対をなすのが、今年の流行語大賞に選ばれた「インスタ映え」なのだろう。言葉や中身ではなく、かわいい、おいしそう、楽しそうな「映える」写真と「いいね！」の数が「私」の輪郭をかたどる。言葉を介するよりもきつとずっとスムーズに「私」は他者とながれる。

なるほど、言葉で説得しようという意思を欠く一方、「看板」や「包装紙」のデザインに傾注するいまの政治のありようは、この時代に適合的と言えるのかもしれない。もちろん、それを「政治」と呼ぶか「集客」と呼ぶかは、別の問題としてある。

#### ■社会的想像力を

「私」を掘り下げられないなら「私たち」を掘り下げるのも難しい。かつては大事件が起きれば、社会が生んだ犯罪かもしれないと、漏れ伝わってくる容疑者の「声」に耳を傾け、時に想像力を使って、背景を理解しようとする「作法」があった。

しかし、秋に発覚した座間の事件。昨年、相模原で起きた事件。自分とは別世界の「異物」が引き起こしたものと、簡単に切り捨ててはいないか。「死にたい」というつぶやきを、「障害者は生きていても仕方がない」という、社会への「挑戦状」を、私たちは真正面から引き受け、考えてきたらどうか。

精密な受信器はふえてゆくばかりなのに／世界のできごととは一日でわかるのに／“知らないことが多すぎる”と／あなたにだけは告げてみたい

(茨木のり子「知らないことが」)

社会的想像力が弱れば、負担を押し付けられた人は押し付けられたまま、ブラックボッ

クスはブラックボックスのまま、力を持つ人の声だけが響く、それはそれでスムーズな社会が現出するだろう。

2017年が終わる。

聞かなかった、聞けなかった数多（あまた）の声に思いをはせる。来年こそはと、誓ってみる。

**社説：人工知能の未来 社会に根付かせる工夫が要る** 読売新聞 2017年12月31日

進化し続ける最先端技術を国民の暮らしにどう役立てるか。人口減社会を乗り切る技術革新のあり方について、知恵を絞らねばならない。

少子高齢化の進展で、2030年の日本の生産年齢人口は6900万人となり、15年間で750万人も減る見通しだ。労働力不足は年々深刻化し、企業の経営環境が厳しさを増していく。

日本の時間当たり労働生産性は、主要国で最低水準だ。このうえ人口減が進めば、国際競争力の一段の低下が避けられない。

こうした事態を打開するカギとして、人工知能（AI）やロボット、あらゆるものがインターネットにつながるIoTの技術が脚光を浴びつつある。

最先端技術が、企業の人材不足を補う。効率化で増えた利益は賃上げにつながり、個人消費の盛り上がりも期待できよう。

政府は、AIを社会に根付かせるため、新たな法整備や規制緩和などの後押しが欠かせない。

例えば、自動運転車などAIを使った製品による事故・損害に対処する法律はこれからだ。AI開発は、資本力と人材の層の厚さに勝る米国、中国が先行する。日本も競争に乗り遅れないような環境作りが必要となる。

気がかりなのは、AIやロボットの高度化が、人手不足の解消だけでなく、将来的に失業増を招くとの指摘が少なくないことだ。

日英の共同研究では、10～20年後には現在の職業の半分が、AIやロボットで代替できるようになるとの予測がある。

既に外国語を自動翻訳するAIは、観光施設や自治体などで利用が始まっている。銀行もAIを商品提案に役立てている。

数年後には、スーパーのレジやホテルのフロント業務なども、無人化が進むとの見方がある。「人への投資」が大切となろう。新たな成長分野への人材移動が求められる。柔軟に対応できるよう、企業は、従業員研修などの充実に努めることが重要だ。

だが、従業員の教育訓練費は、1990年代以降、減少傾向にある。企業任せにするのではなく、大学や専門学校などで、社会人が新たなスキルや知識を学び直せる体制作りも課題である。

近い将来、人間の思考に匹敵するAIが登場するかどうかは、専門家にも多様な意見がある。少なくとも、技術革新に伴う失業などの副作用について、産学官で十分に分析し、対応策の検討を急いでもらいたい。

**社説：【2017回顧(下)】 痛みの記憶つなぎ留め** 高知新聞 2017年12月30日

人の痛みに寄り添い、記憶にとどめる。その大切さを考えさせられた年ではなかったか。

2014年232人、15年215人、昨年244人。国が調査した全国の児童生徒の自殺者数である。やり切れない。

1980年代まで200人を上回ることもあった自殺者数はその後、100人台で推移していた。だが、2010年代に再び200人を超え始めた。子どもたちを巡る悲報は今年もやむことはなかった。

自殺の理由として「家庭の不和」「進路の悩み」さらに「いじめ」などが挙げられる中、実に半数以上が「不明」とされる。

家族にも、友人や学校にも理解されない苦悩の淵に迷い込み、行き場を失っている。日本人の15～39歳の死因の1位は自殺だ。何と息苦しい社会なのか。その「なぜ」を象徴する凄惨（せいさん）な事件が起きた。

神奈川県座間市で27歳の男の自宅アパートから9人の若者の切断遺体が見つかった。女子高生ら10～20代の若者たちだった。男はインターネットに自殺願望を書き込むなどしていた女性たちとつながり、誘い込んでいた。

捜査段階で真相を推論するのは禁物だが、被害者らの環境に通底していたのは貧困や格差、将来不安からの生きにくさではなかったか。

無差別的殺傷事件が近年相次ぐ。昨年も相模原市の障害者施設で元職員が19人を殺害する事件が起きた。犯人の動機も判然としない。

虐待、過労死、企業の検査違反、大相撲暴行事件、新幹線の異常放置走行…。共通するのは痛みへの鈍麻だ。その中で不正や暴力は連鎖し、慢心や緩みがはびこる。政治家の心ない暴言も同根だろう。

核兵器禁止条約の実現に尽くした非政府組織「核兵器廃絶国際キャンペーン」に今年のノーベル平和賞が贈られた。その活動の推進力となったのが広島、長崎の被爆者たちの証言活動だった。

深い傷の記憶を風化させまいと、70年余にわたり語り続けてきた不屈の訴えが結実した。一方で、日本は「核の傘」を抜け出せない矛盾を抱え込んだままだ。

文学賞を受賞した長崎市生まれの英国人カズオ・イングロ氏は被爆者の母から「ヘイワ」を教わった。過去に向き合う「記憶」の物語を紡ぐ作家は今、テロや差別主義の拡大を憂慮する。負の歴史への忘却が再び過ちを生む。

半面で、記憶の継承の難しさも思う。沖縄戦で住民が集団自決したチビチリガマを荒らした少年に惨劇の過去は伝わっていなかった。

四国電力伊方原発3号機の運転を差し止めた広島高裁の仮処分決定は、約9万年前の阿蘇山噴火を想定せよと命じた。人為の限界を思い知らされた東電福島第1原発事故から何を学ぶべきなのか、という根源的な提起ではないか。

痛みを共有し、記憶につなぎ留めていく。その積み重ねの中に安心と共生の未来が築かれるはずだ。

**社説：最近、たるんでないぞ 大晦日に考える** 中日新聞 2017年12月31日

いろいろあった一年もついに暮れますね。大晦日（おおみそか）ぐらいは、ということで大目に見ていただき、ちょっとくだけて笑いや遊びについて書いてみます。

二〇一七年も三百六十五日目。「いやはや、もう一年か」と感慨にひたっている方も少なくないでしょう。こんな笑話があります。

雷様が、お月様とお日様と一緒に旅をした。だが朝、宿で雷様が目を覚ますと独りぼっち。宿の者に聞けば「お月様もお日様ももう出発なさいましたよ」。雷様が一言。「月日のたつのは早いなあ」

#### 「新解釈」で笑う

笑いといえば、割と有名ななぞなぞを一つ。英語で一番長い単語は何？ 答えは、smiles。「ほほ笑み」のスマイルの複数形とか、人の姓にもありますね。で、たった六文字でなぜこれが一番長いのか。最初のSと最後のSの間が1マイル（1.6キロ）あります…。スマイル、いや薄笑いでも浮かべていただけたら幸甚。

笑いとは何かは難問ですが、例えば劇作家の鴻上尚史（こうかみしょうじ）さんがどこかで書いていたのは「新解釈」。そういえば、駄洒落（だじゃれ）だって、言葉に別の意味を見いだすのですから新解釈といえは新解釈ですね。時に「おやじギャグ」などと蔑（さ

げす) まれませんが、なかなかの傑作もあってー。

ゴルフ場で、一人が、もう少しでグリーンに乗るというナイスショット。その瞬間、誰かが叫ぶ。「あわや、乗りこ!」。まあ、ブルースの女王を知る世代限定ですが。

これも「新解釈」でしょうか。記憶曖昧ながら、前にネットで見た変換ミスコンテストの応募作の一つが、確かこんな感じでー。

その人は、友人とメールで信仰について論争中、「(自分は) 神の存在を信じないし、不幸とも思わない」と大まじめに打って送ったつもりが、変換ミスでこうなっていたそうです。「紙の存在を信じないし、拭こうとも思わない」

### 「遊び」へと飛び出せ

ちょっと言葉遊びがすぎたでしょうか。でも、笑いは健康にいいとも言われますし、昔から「笑って損した者なし」と。ただ、笑いは、笑う方にゆとりがなければ生じ得ないのも確かです。

古く外の目から言われる日本人の特質はといえば、第一に勤勉、まじめであって、ついつい仕事にのめり込む傾きが。ゆとりというのは案外苦手な気がします。

勤勉は美点ですが、そこに企業の競争・効率至上主義がつけこむと、個人が無理を強いられ続けかねません。今年を振り返っても、過労死や過労自殺など働き方をめぐる悲劇は相次ぎました。

文筆家のワクサカソウヘイさんは雑誌『望星』十二月号のエッセーで、そうした、こうあらねばならない、と不断に迫ってくるような社会状況を「意味の呪縛」と呼んで、こう指摘しています。

<私たちは意味の呪縛に対抗する、唯一にして尊い手段を持っている。それが「遊び」だ>。草野球でも登山でも盆栽でも、とにかく何でもいいのでしょう。意識的に「意味の構図」から無意味＝「遊び」へと飛び出すべし、と。

「遊び」といえば、もう、ひと昔前になりますが、原題にひかれて一冊の本を買ったことがあります。トム・デマルコという米国人コンサルタントが書いたビジネス書ですから、本来なら本屋で見ても素通りなのですが、表紙の「S l a c k」という言葉が目にとまったのです。

聞かない英語ですが、筆者の愛好する遊び、フライフィッシング(西洋式毛針釣り)ではなじみ深い言葉で、結んだ毛針を水面で流す時、糸につくる「たるみ」を指します。それがほどけて流れを吸収してくれる間は、毛針が糸に引っ張られて動くことなく自然に流れてくれる。ピンと張ってはいはそうはいきません。

この本(邦題『ゆとりの法則』)の著者はビジネスにも、その「たるみ」こそが肝要だと説いています。効率化を進めすぎて、スラックがなくなると、変化への対応力も失い、生産性は損なわれる、というのです。

こんな例を挙げています。

九ますに八個の数字タイルが並ぶパズル。そこにもう一つタイルを入れて、空きスペースをなくしてしまうとどうなるか? もう、タイルは一切、動かさない…。

### スラックがなくなると

この「たるみ」は「遊び」に通じます。ほら、ハンドルの遊びなどと言いますし。「ゆとり」と呼び換えてもいい。さすれば、笑いも生まれ得ましょう。

企業にも個人にも大事なのですから、むしろ、上司は「最近、たるんでるぞ」じゃなく「最近、たるんでないぞ」と部下を叱咤(した)すべきなのかもしれません。

さて、もう一つ寝るとお正月。いい新年にしたいものです。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

